

第4節 中村1号墳の石棺の時期と灯明石

1 はじめに

山陰では家形石棺が90基確認されている。その内、約8割の74基が出雲に集中している。このことから、出雲において特に多く家形石棺が採用されていたことがわかる。したがって、家形石棺は、横穴式石室と同じく、出雲地域の古墳後期の社会構造や死生観などについて考える上で重要な材料なのである。

中村1号墳には、玄室のA石棺と前室のB石棺の2基が設置されている。A石棺は組合せ式家形石棺で、灯明台を付設する。B石棺は蓋石がなく、組合せ式石棺を簡略化したものと理解している。本稿ではこれらの両者の構造から設置時期を検討することを第1の目的とする。そして、A石棺に伴う灯明石について検討し、中村1号墳の特徴を明らかにすることが第2の目的である。

本稿では組合せ式家形石棺の各部位の名称を第1図に示し、この名称で論を進めていきたい。また、石棺の時期については、大谷晃二（大谷1994）および第7章第6節の須恵器編年、本章第1節の石室編年を基準とした。

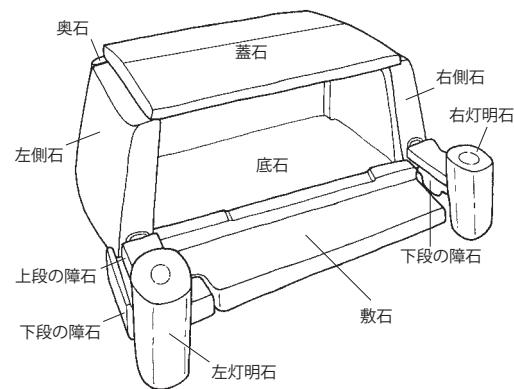
2 家形石棺の研究史

出雲における家形石棺の研究史については、石橋宏が詳細にまとめている（石橋2006）。ここでは本稿に関係する家形石棺と灯明石についてそれぞれ簡単にふれておきたい。

（1）家形石棺の研究史

山陰地域における家形石棺の考古学的研究は、山本清による研究が基礎となっている（山本1971）。山本は家形石棺が出雲、伯耆、因幡など限られた地域に分布することを明らかにし、それらが出雲に圧倒的に集中することを指摘した。また、剝抜式と組合せ式、横口の有無により型式分類を行い、横口式のものは出雲にのみ集中し、それがことごとく平入り側に口が開くことを指摘している。

そして、1980年代以降に石棺研究が進んできている。まず、和田晴吾が出雲の家形石棺の蓋の頂部平坦面の広狭と断面形態、身の横口部の構造と石材の使用法を重視した分類基準を示した（和田1983）。



第1図 組合せ式家形石棺の部位名称

これを根拠に出雲地域を西部（出雲市周辺）、中部（宍道湖沿岸）、東部（松江・安来市周辺）の3地域に分けて各地域の特徴を抽出し、4時期の編年を示している。そして、出雲西部の剝抜石棺は、横口式という九州的な葬法を受け継ぎながらも畿内的な要素（蓋の外面形態や剝抜式の身）を留めるのに対し、出雲東部の組合せ式家形石棺は、九州的または出雲的であるとした。また、奥石が無く、石室や横穴墓の壁面をもつてこれにかえているものがあることを指摘した。

出雲西部の横穴式石室編年を行った角田徳幸と西尾克己は、その論文で刳抜式家形石棺の変遷にも触れている（角田・西尾 1989）。角田らは、和田が示した今市大念寺古墳玄室棺→妙蓮寺山古墳棺という考えを棺蓋頂部平坦面の広さと突起の有無から否定した。具体的には、棺蓋の幅と平坦面の幅の比率は2つの棺とも同じであること、また、今市大念寺古墳玄室棺の身には突起はないが妙蓮寺山古墳棺にはあることをあげ、今市大念寺古墳玄室棺が妙蓮寺山古墳棺を遡ることはないとした。しかし、これらに遅れて築造されたことが明確な上塩治築山古墳大石棺の身には突起があることから、突起の有無で石棺の時期差を証明したことにはならないと考える。

大谷晃二は河川流域ごとに盛行する属性（棺蓋平面形・棺身の仕障・敷石）が違うことに着目し、出雲を4地域に分けて石棺の地域性の抽出した。すなわち、①棺蓋の墳頂部が分銅形で袖石は立面長方形、敷石を有する安来平野地域、②仕障にU字形の刳り込みを設ける大橋川南岸地域、③板状の蓋石による箱形石棺が盛行する宍道湖沿岸地域、④組合せ式家形石棺において横断L字形の底石と平面L字形の短辺を持ち奥石を持たない神戸川下流域という地域性を示した（大谷 1995）。

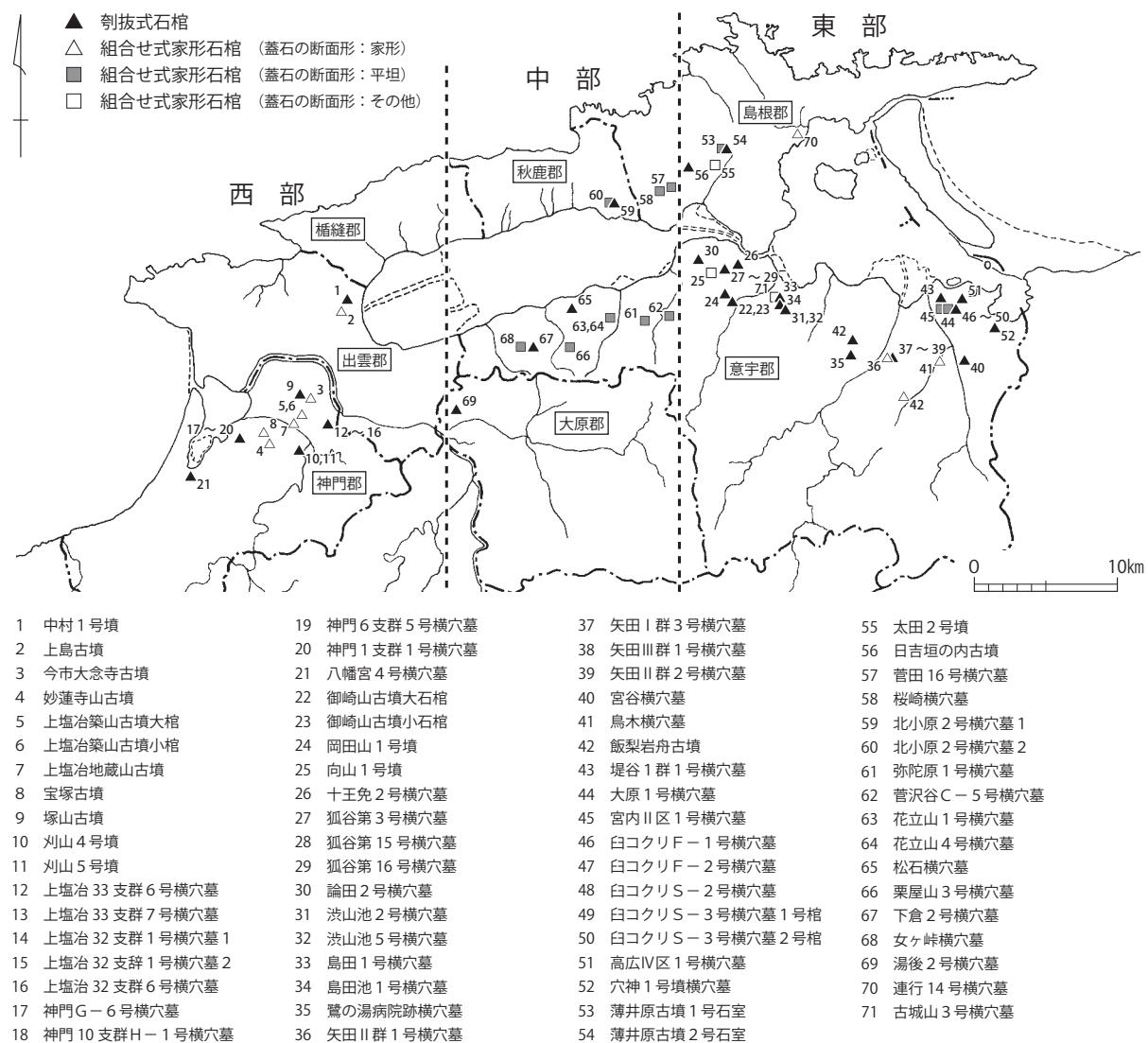
その後、西尾は上塩治築山古墳の報告において、刳抜式家形石棺の変遷を縄掛突起や横口、蓋石の外面頂部、石材などの特徴によってI類からIII類に分類し、この順に変遷したと考えた。そして、刳抜式家形石棺自体は神戸川下流域の首長墓のみに限られ、発展することなく姿を消したと結論付けた⁽¹⁾。1999年には、松山智弘が出雲西部の横穴墓を検討する中で、出雲4期（大谷編年）の横穴墓の石棺・石床の形態には多様性があるが、出雲5期には側石を横断面L字形に加工し、奥石を略すなど定型化した石棺がみられること、そして、この定型化した石棺は出雲西部に特有のものであることを明らかにした（大谷・松山 1999、大谷 2010）。

2004年には、角田が山陰の因幡東部、出雲東部、出雲西部の家形石棺の受容期を中心に地域性をまとめている。肥後の横口式家形石棺や石屋形を基に独自の形態を生み出した出雲東部、畿内系家形石棺を祖形としながらも出雲東部との交渉から九州的な要素を取り入れた出雲西部、というあり方は、横穴式石室の受容の仕方と同様であると理解ができる点を指摘している（角田 2004）。

2006年には、石橋宏が大谷や角田の石棺分類を基に出雲の家形石棺を再検討している。石橋は出雲を7地域、4段階に分けて、各小地域ごとの変遷と地域間の影響関係を整理した。そして、畿内の家形石棺との比較から出雲の家形石棺の特徴をあげ、日本海を介した交流で北陸や九州の家形石棺の中に出雲系の家形石棺があると指摘した（石橋 2006）。石橋の研究はこれまでの家形石棺研究を総括したものである。

以上の家形石棺の研究史をまとめると、出雲の家形石棺の研究は、地域性の抽出という地域の細分を中心に行われてきた。まず、山本による山陰の中の出雲の抽出が行われ、そして、和田による出雲の3地域区分、大谷による4地域区分、石橋による7地域区分と地域細分が進んできた。これらの研究は、九州や畿内への系譜を求めることがや小地域間の影響関係をつかむことによって当時の出雲の地域社会の実態に迫ること、また、石橋のように列島内における交流についての検討に有効な手段となっている。しかし、出雲が小地域に細分できることが示すように、地域ごとに石棺が少しづつ違うのである。そのため、出雲全域に通じる型式分類と型式組列を明確にすることが困難である。これま

での論文では地域性の抽出を行うための分類が行われ、特徴が明確な部分のみが注目されてきた。そのため地域ごとの石棺自体の変遷が明確に示されていない。そこで、中村1号墳の石棺を位置付けるためには、小地域の組合せ式家形石棺の型式分類を行い、その組列を示すことが必要である。この方法によって、中村1号墳の石棺を位置付けることが本稿の第1の目的である。ここで、研究史と絡んで問題となるのは、出雲の地域区分と中村1号墳をどの地域に置くかである。これまで家形石棺の詳細な地域区分が行われてきたが、実際に出雲の古墳時代後期を位置付ける際は、横穴式石室の形態から東西出雲の2地域区分で表現されている。それによると中村1号墳は出雲西部に位置付けられる。一方、3地域区分を示した和田は、中村1号墳の南西にある上島古墳を中部地域としている（和田1983）。この中部地域は、平坦な蓋石の箱式石棺が主体となり、また、玄門閉塞の門状陽刻が多く分布する地域であることも指摘されている。そこで、本稿では、組合せ式石棺の蓋石の形状を重視し、家形のものが主体をなして分布する東西出雲に、平坦なものが主体となす出雲中部を加えた3地域区分を新たに提示する（第2図）。したがって、中村1号墳は出雲西部の石棺の中で検討してみたい。



第2図 家形石棺からみた出雲の3地域区分（1：500,000）

(2) 灯明石の研究史

家形石棺の研究はかなり蓄積されている一方、中村1号墳のA石棺に付属する灯明石についての研究は少ない。1995年に角田が家形石棺を九州系譜と考える要素として、灯明石を取り上げている（角田1995）。出雲東部に5例あることを示し、その系譜を福岡県桂川町の王塚古墳の石屋形に付属する灯明石に求めた。さらに、王塚古墳は肥後の横穴式石室の要素を備えていることから、肥後で灯明石という要素が成立し、各地に波及したと指摘している。大谷晃二は松江市御崎山古墳の報告で、馬橋川・意宇川流域の横口式石棺の変遷を示し、導入期には仕障、袖石、敷石、灯明石を備えるが、出雲4期には仕障のみを残すと指摘している（大谷1996）。2002年には中村1号墳A石棺で灯明石が発見され出雲で6例目かつ、出雲西部では初めての発見例となった。これを受け、内田律雄が灯明石についてまとめている（内田2006）。内田は灯明石を備えた家形石棺と敷石（内田は敷石のことを浜床と呼ぶ）は必ず伴うと指摘し、敷石のみが発見されている石棺の場合、追葬時あるいは葬送儀礼終了後に灯明石が片付けられたか、あるいは盗掘されたと考えている。そして敷石や灯明石を使った葬送儀礼が行われなくなると、それに代わって、仏教の影響を受けて暗文土師器の灯明皿を使う新しい葬送儀礼が7世紀になって採用されたと指摘した。そして、結論として、7世紀代は灯明石という出雲的観念に決別し、灯明皿を使用する新しい葬送儀礼が始まった時期とした。また、和田晴吾は灯明石の系譜について、中国の「石棺床」正面の衝立の入口に「双闕」と呼ばれる門施設があり、灯明石はこれを真似た可能性があると指摘している（和田2007）。

以上、灯明石の研究史についてまとめた。現状は灯明石の分布と、個別に検討された程度で、詳細な型式学的研究が行われていないことがわかった。そこで、出雲における灯明石の系譜と変遷をを型式的に明らかにし、中村1号墳A石棺に付属する灯明石の位置付けを行うことが本稿の第2の目的である。

3 出雲西部における組合せ式家形石棺の編年

すでに、和田や大谷、石橋が指摘している石棺奥石の省略と側石の形態に注目し、出雲西部における組合せ式家形石棺について型式分類し、編年を組み立てたい。

(1) 組合せ式家形石棺の型式分類

分類は奥石があるものをI類、奥石がないものをII類、そして、側石の横断面形が、a類：長方形、b類：コ字形、c類：L字形とした。各石棺の特徴を第1表に、編年図を第3図に示す。側石の横断面形は左右で異なるものがあるので、型式的に新しい方を採用し型式決定を行っている。Ia類は今市大念寺古墳前室棺、上塩治33支群7号横穴墓棺。Ib類は中村1号墳A石棺、八幡宮4号横穴墓棺。Iia類は刈山4号墳棺、中村1号墳B石棺。Iib類は塚山古墳棺。Iic類は刈山5号墳棺、神門10支群H-1号横穴墓棺、神門1支群1号横穴墓棺、神門6支群5号横穴墓棺、上塩治32支群6号横穴墓棺、上塩治32支群1号横穴墓左棺、上塩治32支群2号横穴墓左棺。

(2) 型式組列と時間的関係

先に分類したIa～Iic類を須恵器の編年（大谷1994）と組み合わせたものが第1表である。須

恵器などの副葬品や石室構造を基にI類からII類への変化、a類からc類への変化が読み取れる。すなわち、Ia類→Ib類とIIa類へ、そして、Ib類とIIa類から→Ib類→IIC類の大まかな型式組列が導きだせる。以上の型式展開から、出雲西部における組合せ式家形石棺は1期～3期にまとめられる。

組合せ式家形石棺1期は導入期、須恵器編年では出雲3期の段階である。時期は明確ではないがIa類の今市大念寺古墳前室棺⁽²⁾（第3図1）が採用される⁽³⁾。刳抜式家形石棺では畿内系の横口のない上島古墳が出雲2期末に採用されている。出雲3期には横口のある今市大念寺古墳玄室棺や妙蓮寺山古墳棺がある。妙蓮寺山古墳棺には横口に閉塞石が有り、今市大念寺古墳玄室棺と前室棺の横口にも妙蓮寺山古墳棺と同じく閉塞石の存在を示す記事がある⁽⁴⁾。

組合せ式家形石棺2期は多型式（Ia類、Ib類、IIa類、Ib類、IIC類）の組合せ式家形石棺が併存する⁽⁵⁾、須恵器編年では出雲4期の段階である。この時期以降、平入りの横口はあるが閉塞石はないものとなる。奥石のないII類や、側石の横断面形b・c類が出現する。この石棺が設置される埋葬施設は、横穴式石室と横穴墓である。この時期から石床も採用されていて、組合せ式家形石棺と同じく奥の縁を無くす石床もある。また、仕障にU字形の割り込みを設けるものが、中村1号墳A・B石棺（第3図3・6）、八幡宮4号横穴墓棺（第3図4）、塚山古墳棺（第3図7）で採用されている。同時期の刳抜式家形石棺である上塩治築山古墳大・小石棺、宝塚古墳棺にもU字形の割り込みが採用されている。この特徴は、出雲3期の出雲東部安来市矢田II群1号横穴墓棺に採用されており、出雲西部には1段階遅れた出雲4期になって採用されたことがわかる。

組合せ式家形石棺3期はIIC類のみが2期から継続して採用される、須恵器編年では出雲5～6期の段階である。蓋の内面に割り込みがあるものやないもの、左右の側石の横断面形が異なるものもあり、石棺のすべての属性が定型化するわけではない。この石棺が設置される埋葬施設は横穴墓のみである。刳抜式家形石棺は、上塩治地蔵山古墳が採用されている。

第1表 出雲西部における家形石棺の変遷

組合 石棺	分類	側石の横断面形			横口	出雲西部の刳抜石棺	土器編年	
		長方形(a類)	コの字(b類)	L字(c類)			出雲	畿内
1期	奥石有 (I類)				なし	上島古墳	出雲2期	TK10
		今市大念寺古墳前室棺			あり (閉塞石あり)	今市大念寺古墳玄室棺 妙蓮寺山古墳	出雲3期	TK43
2期	奥石無 (II類)	上塩治33支群7号横穴墓	中村1号墳A石棺 八幡宮4号横穴墓			上塩治築山古墳	TK43未 出雲4期	TK209
		刈山4号墳	塚山古墳			宝塚古墳		
		中村1号墳B石棺						
		(上塩治33支群6号横穴墓)		刈山5号墳				
3期				神門10支群H-1号横穴墓 神門1支群1号横穴墓 神門6支群5号横穴墓 上塩治32支群6号横穴墓 上塩治32支群1号横穴墓左棺 上塩治32支群2号横穴墓左棺	あり (閉塞石なし)	地蔵山古墳奥棺	出雲5期 出雲6期	飛鳥1 飛鳥2

(3) 中村1号墳A石棺の特徴

本稿の目的である中村1号墳A石棺とB石棺の設置時期を明確にするため、さらに特徴をまとめてみたい。

A石棺はI b類で組合せ式家形石棺2期となる。他に出雲西部では出雲市八幡宮4号横穴墓棺がある。出雲中部のb類は出雲5期の雲南市湯後2号横穴墓棺があげられる。また、出雲東部のb類は出雲4期の松江市十王免2号横穴墓棺、出雲4期後半の松江市向山1号墳棺、出雲5期の松江市論田2号横穴墓棺があげられる。また、今のところb類が出雲3期に遡る例はない。中村1号墳と同時期と考えられる出雲市塚山古墳は、II b類という新しい特徴をもつ。ここで、出雲西部のb類をさらに形態から細分してみたい。中村1号墳A石棺の側石のコ字形の割り込みは浅く、八幡宮4号横穴墓棺と塚山古墳棺の割り込みが深い。割り込みが深い特徴はc類と同じと考えられ、型式的には同じb類でも割り込みが浅いものから深いものへ、つまり側石が薄いものから厚いものへの変遷が推定できる。また、奥石と側石の組合せ方をみると、中村1号墳A石棺は側石の外側に奥石がある。これは、今市大念寺古墳前室棺と同じで古い特徴である。八幡宮4号横穴墓棺は側石の内側に奥石が接し、そして、塚山古墳棺では奥石を省略する。以上のことから、b類は、中村1号墳A石棺→八幡宮4号横穴墓棺→塚山古墳棺という型式変化が推定でき、A石棺は石棺2期の中でも古い特徴があることが分かる。

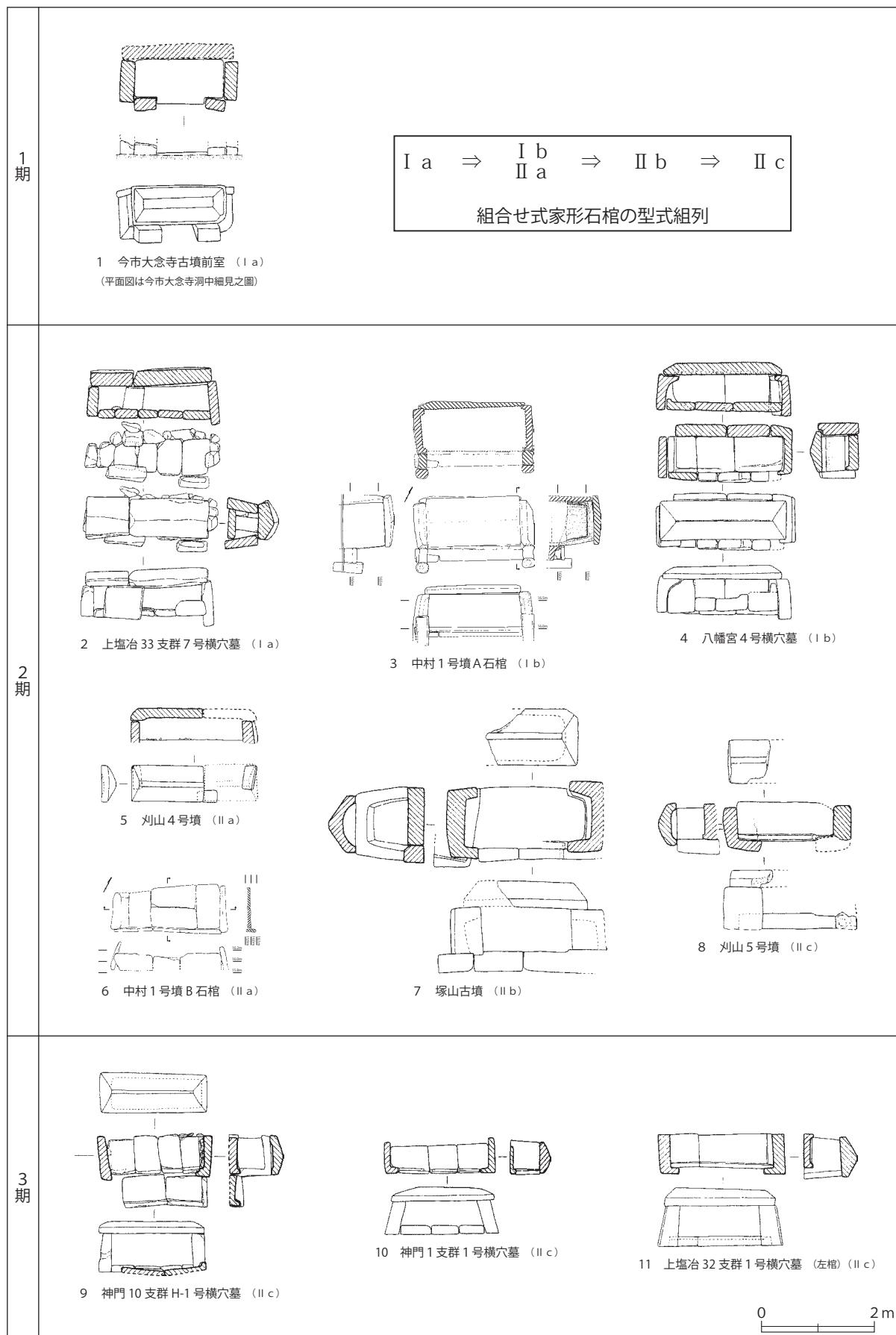
(4) 中村1号墳B石棺の特徴

B石棺はII a類で組合せ式家形石棺2期となる。類例として刈山4号墳棺があげられる。II類は組合せ式家形石棺3期に盛行する。出雲東部、中部では基本的に奥石があるので、II類は出雲西部の地域性が明確に表れる特徴である。横断面形のa類は石棺1期～2期にみられ、3期には神門10支群H-1号横穴墓のように片側の側石のみに採用されている。したがって、B石棺は組合せ式家形石棺2期と考えられ、奥石をなくすという新しい特徴がある。ただし、奥石をなくす特徴が組合せ式家形石棺2期のどの時期から採用されたかは、不明である。

(5) 中村1号墳A・B石棺の設置時期

A石棺の石室への設置時期は灯明石を地山に掘り込んで設置していることから、石室築造時であることがわかっている。B石棺の石室への設置時期は地山の上に盛土が施された後で、築造時あるいは追葬時の2つの可能性が考えられる（第4章第1・2節）。

以上のA・B石棺の特徴からその時期差について考えてみたい。確実に言えることは、家形石棺の型式と須恵器編年から組合せ式家形石棺2期（出雲4期）に両石棺が設置されていることである。石棺型式では、奥石があるI類のA石棺が古く、奥石がないII類のB石棺の方が新しい特徴をもつが、時期差として断言できる証拠がない。また、A石棺とB石棺の設置面が異なることについては、時期差とも考えられるが工程差とも考えられる。松江市御崎山古墳では、大石棺の付属施設を取り除き、追葬時に小石棺を設置している。この例から、中村1号墳B石棺も追葬時に設置した可能性もある。あるいは、中村1号墳は複室構造であり当初から計画して設置されていた可能性がある。現状では、A石棺とB石棺の時期差を明確にすることは難しい。したがって、A・B石棺は須恵器の年代から出



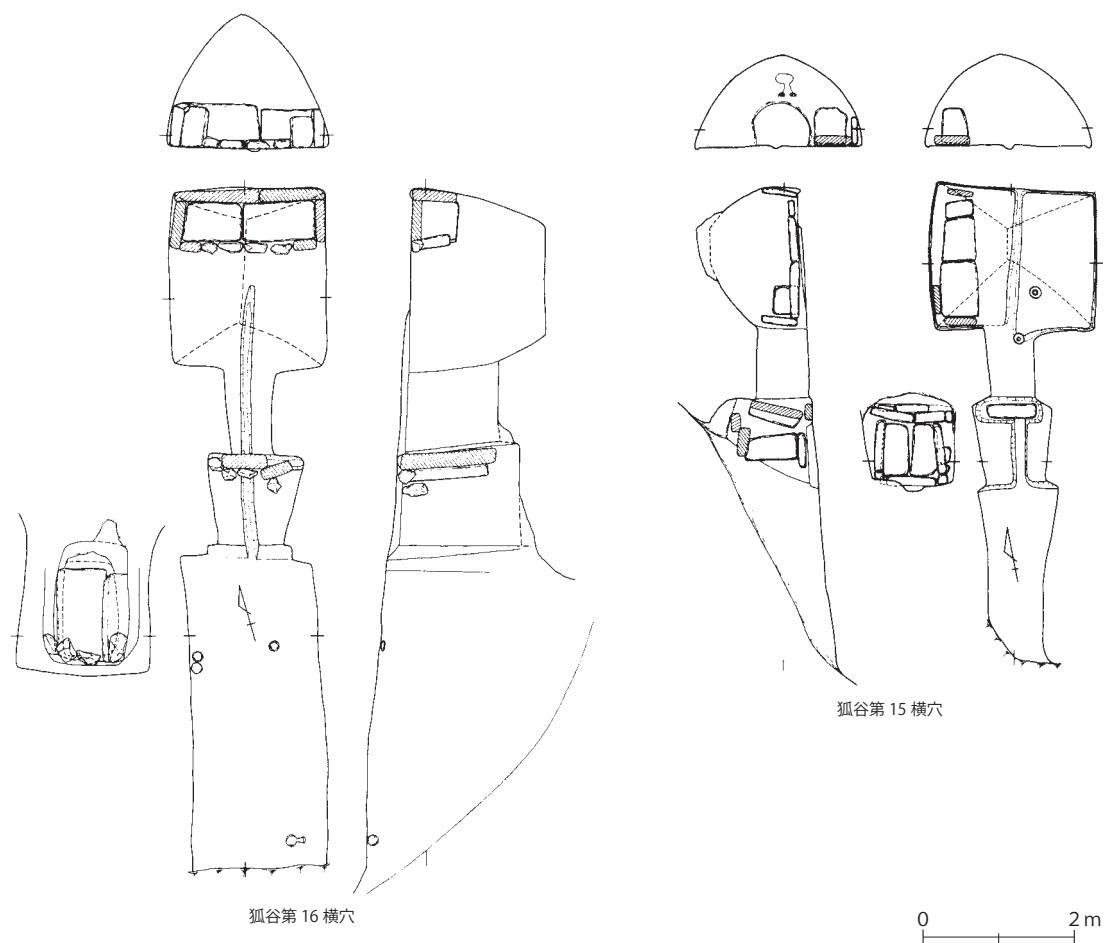
第3図 出雲西部における組合せ式家形石棺の編年 (1 : 100)

雲4期前半頃に石室築造と同時に設置されたか、あるいはA石棺が石室築造時に、B石棺は初葬からそれほど時間が経ていない追葬時に設置されたとも考えられる。

4 出雲西部における石棺形式とその階層性と特徴

前項で出雲西部における組合せ式家形石棺の編年を示した。初めに、剖抜式家形石棺との階層差を示しておきたい。出雲3期と考えられる出雲市今市大念寺古墳では玄室に剖抜式家形石棺、前室に組合せ式家形石棺が採用されている。また、丁寧に造られた剖抜式家形石棺は横穴墓に設置された例がない。このことから、上位階層の石室墳には丁寧に造られた剖抜式家形石棺が、下位階層の横穴墓には組合せ式家形石棺が採用され、剖抜式家形石棺が組合せ式家形石棺よりも上位階層の棺であることがわかる。

次に、組合せ式家形石棺と石床とはどのような関係なのであろうか。横穴式石室墳である出雲4期の出雲市放レ山古墳や出雲5期と考えられる出雲市小坂古墳、詳細な時期は不明であるが宇那手塚山古墳には組合せ式家形石棺は採用されず、石床のみが採用されている。したがって、横穴式石室墳には組合せ式家形石棺と石床が採用されている。また、横穴墓でも組合せ式家形石棺と石床が採用されている。つまり、石室墳や横穴墓間では石棺と石床から導き出せる社会的な階層差がそれほど明確にあったとは考えにくい。階層差が明確に表れるのは、上位階層の棺に使われたと考えられる丁寧な造



第4図 石棺の蓋石がない未盗掘横穴墓（1：100）

りの削抜式家形石棺であることを改めて指摘しておきたい。

ここで、中村1号墳B石棺の特徴の1つである蓋石のないことについて検討する。出雲には蓋石がない石棺が他に2例ある。第4図は玄門部に板石の閉塞石が残存し、未盗掘の横穴墓であることが明確な出雲5期以降の松江市狐谷15・16号横穴墓である。奥石と側石の上面の高さが揃っていないことからも蓋石が無かった可能性が高い。これらは、追葬時に石棺蓋石が取り除かれた可能性もあるが、埋葬儀礼の終了時には石棺蓋石が無かったことは確かであろう。出雲4期には、出雲西部に石床が出現する。これらも、蓋石がないものとして同じ類の構造と考えられる。このことから、組合せ式家形石棺の上部構造、つまり家形の形状は、出雲4期のある時点からそれほど必要なものではなかったこととがわかる。

また、前項の編年から、出雲3期の石棺は横口式で閉塞石があり、和田晴吾が示す「閉ざされた棺」にあたり、出雲4期以降は横口式で閉塞石がない「開かれた棺」にあたる（和田2003）。したがって、出雲4期には遺体が密閉されない九州的な思想が強く浸透していて、蓋石のないB石棺や石床はこの思想に基づいて作りだされていると考えられる。

5 出雲における灯明石の導入と展開

中村1号墳A石棺には、灯明石、敷石、2段の障石の付属施設がある。本稿ではこれらの系譜と展開を明らかにしてみたい。ただし、灯明石と呼んでいるが、この上から灯明皿や煤が付着した例がなく、灯りをともした明確な根拠はないのが現状である。

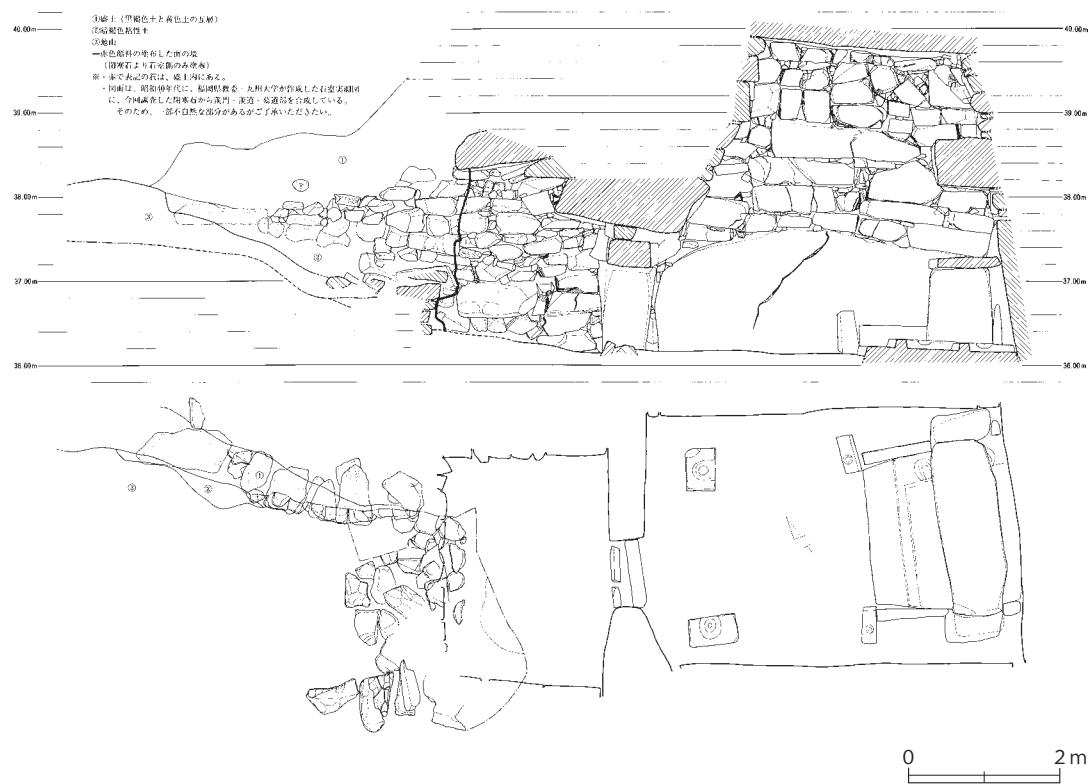
(1) 出雲における灯明石の系譜

出雲以外の灯明石をもつ埋葬施設は、福岡県桂川町王塚古墳と熊本県植木町宮穴17号・22号横穴墓である。そこで、それぞれの灯明石の状況を概観し、出雲の灯明石の系譜について考えてみたい。

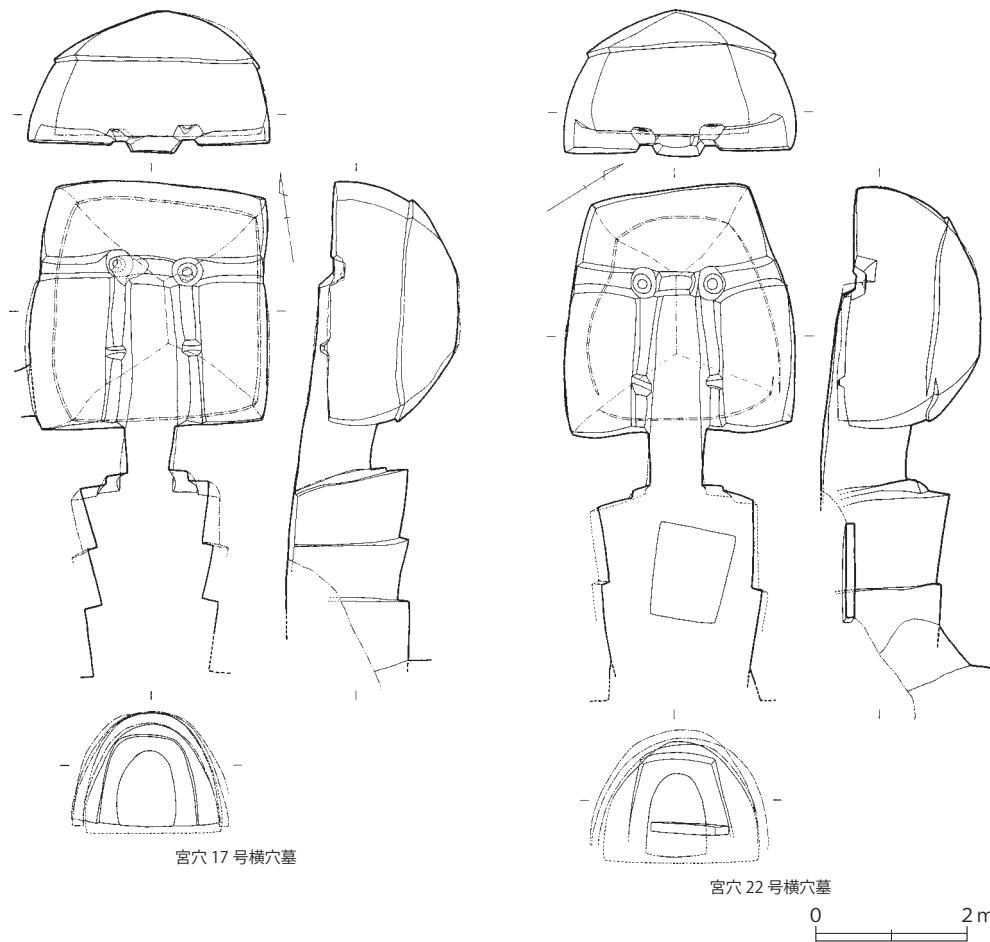
王塚古墳はTK10型式期の横穴式石室を埋葬施設にした古墳である（第5図）。2基の灯明石は、側石の約80cm前側にある。灯明石は直方体をなし、横断面形が横長の長方形である。その上面に円い窪みがある。石屋形と灯明石の間には左右に障石があり、その内側に敷石がある。敷石は、石屋形の底石と同じ石、一石で造られている。この底石には遺体の頭を置くための加工があり、敷石にはないことから、敷石は遺体を安置する施設ではないことがわかる。このように、王塚古墳の灯明石は単独で存在するのではなく、障石と敷石が付属していることがわかる。また、側石と障石、灯明石の中心は、一直線に並んでいない。

宮穴17号・22号横穴墓はほぼ同じ構造の灯明石をもつ（第6図）。玄室には「コ」の字形に屍床が配置されている。奥屍床の仕切りが左右の屍床の仕切りと接する所の2か所に、円錐台形の浮き彫り彫刻がある。これが灯明石と呼ばれている。その上面の中央には円形の窪みがある。22号横穴墓から圭頭大刀の柄頭が出土している。圭頭大刀は列島でTK43型式期以降にみられる資料で、横穴の時期もTK43以降と考えられ、王塚古墳よりは新しい築造である。

王塚古墳と宮穴17号・22号横穴墓の灯明石は、構造上明らかに異なっていることがわかる。共通することは、灯明石の上面が窪むこと、遺体の正面、平入り側に2基配置されていることである。



第5図 福岡県王塚古墳石室（1：100）



第6図 熊本県宮穴横穴墓群（1：100）

以上の状況から出雲における灯明石の系譜は、結論を先に示すと、明らかに王塚古墳の状況に近い。これについては以下で詳述するが、出雲には灯明石だけでなく障石、敷石がセット（以下、これらを石棺の付属施設と呼ぶ）で伝播してきているからである。したがって、王塚古墳の石室が肥後の影響を受けて成立していても、灯明石の系譜は肥後には求めることができない。現状では灯明石という要素は、筑紫から肥後と出雲に波及し、それぞれの地域で変容や省略をしていったと考えられよう。

（2）出雲における灯明石と石棺付属施設の分類と展開

王塚古墳の灯明石の状況を踏まえ、出雲に6例ある灯明石⁽⁶⁾とそれに加え、組合せ式家形石棺に付属する施設について検討し、中村1号墳A石棺の灯明石について検討してみたい。王塚古墳の石屋形に付属する施設の特徴を踏まえ、出雲における組合せ式家形石棺の付属施設の特徴を示したのが第2・3表である。第7図に型式組列、第8図に変遷図を示した。そして、敷石の前側に縁がないI類と縁がある箱形のものをII類に分ける。さらにI類は灯明石・障石・敷石がセットになるもの：a類と灯明石が無く障石と敷石のもの：b類、敷石のみ：c類に、II類は灯明石があるもの：d類と灯明石がないもの：e類に大まかな型式分類ができる。さらに属性を細分する。灯明石の横断面形は、長方形のもの：イと、円形状のもの：ロに分けることができる。また、a類の付属施設の配置をみると、側石と障石、灯明石の中心が一直線に並んでいない：α類と、側石と障石、灯明石の中心が一直線に並ぶ：β類に分けることができる。これらの分類から王塚古墳がIa・イα類となる。

出雲における灯明石の導入は王塚古墳から1段階遅れたTK43・出雲3期の松江市御崎山古墳大石棺（第8図1）と安来市宮内Ⅱ区1号横穴墓棺（第8図2）である。これらの石棺付属施設は灯明石・障石・敷石があるa類、敷石はI類で王塚古墳と同じIa類である。細分すると御崎山古墳大石棺がイα類で、宮内Ⅱ区1号横穴墓棺がロα類となる。型的には御崎山古墳大石棺が王塚古墳と同じ特徴を導入し、宮内Ⅱ区1号横穴墓棺はわずかに変容していることがわかる。

これら2基の敷石は石棺の底石や仕障とは別づくりで、一体で造られる王塚古墳とは異なる。御崎山古墳大石棺に付属する施設は追葬時に取り除かれたと考えられ、左側の灯明石と障石のみが残っていて、本来は敷石と右側の灯明石と障石があったであろう。障石は直方体の石を上下2段積んでいるように見える。これは、王塚古墳ではなく、御崎山古墳大石棺のみにある特徴である。

御崎山古墳大石棺と宮内Ⅱ区1号横穴墓棺は、大まかに分類すれば王塚古墳と同じIa類であるが、細かい属性をみれば全く同じものではなく、出雲独自の付属施設に変容させていることがわかる。これが、灯明石導入期（出雲3期・TK43）の状況である⁽⁷⁾。

次の出雲4期になると組合せ式家形石棺の付属施設が多様化し、大きく変容する。前時期から引き続きIa類の中村1号墳A石棺（第8図③）、安来市臼コクリS-2号横穴墓棺（第8図4）がある。細分するとこれら2基はロβ類である。前時期の宮内Ⅱ区1号横穴墓棺に近いが、付属施設の配置がβ類になることがこの時期になって表れる特徴である。

また、出雲4期には灯明石をもたないIb類の安来市高広IV区1号横穴墓棺、臼コクリF-2号横穴墓棺（第8図6）、松江市渋山池5号横穴墓棺がある。そして、障石もなくなって敷石のみのIc類に臼コクリF-1号横穴墓、臼コクリS-3号横穴墓1号棺、臼コクリS-3号横穴墓2号棺、松

江市古城山3号横穴墓棺、安来市矢田II群2号横穴墓棺（第8図12）がある。また、II類の事例が1基あり、それはII d類とした渋山池2号横穴墓棺（第8図13）である。渋山池2号横穴墓棺の敷石II類からは人骨が出土していて、この敷石は遺体を置く目的で設置されたと考えられる。この事例から、灯明石を伴う石棺付属施設の設置目的が大きく変容したことがわかる。つまり、石棺の付属施設（I類）から単独の遺体配置施設（II類）へ変化したと考えられる。

出雲5～6期になるとI類はI c類の安来市穴神1号墳横穴墓棺（第8図14）のみで、この時期主体となるのはII類である。II d類には松江市島田池1号横穴墓棺（第8図15）、II e類の島田1号横穴墓棺、出雲市神門10支群H-1号横穴墓棺（第8図⑩）、出雲市上塩治32支群6号横穴墓棺がある。

以上の石棺付属施設についてまとめると（第7図）、I a類は王塚古墳（イα）→御崎山古墳大石棺（イα）→宮内II区1号横穴墓棺（ロα）→中村1号墳A石棺（ロβ）・臼コクリS-2号横穴墓（ロβ）と変遷する。そして、I b類→I c類、II d類→II e類に変遷している。

ここで問題となるのは、灯明石と敷石II類がどのような関係にあったかということである。簡単にいえば、それぞれが並列した機能をもっていた、あるいは、灯明石の機能がほとんどなく形骸化したもので、遺体配置が重視されていたか、ということである。これについては、遺体配置機能がないI類から読み取る。I類のa～cの変化をみると、はじめに灯明石が無くなり、最後まで敷石が残る状況がある。灯明石自体の機能がI類のなかでも重要ではなかったと考えられる。また、灯明石上面の窪みが、導入期の御崎山古墳大石棺にないことや、その後のものに窪みがあつたりのなかつたりすることから、この窪みもそれほど重要な機能を持っていたとは考えにくい。また、II類もd類からe類に変化すると考えられ、灯明石の機能は重視されていない。そうすると、最後まで残る敷石が重要な機能を果たしていたと考えられる。しかし、II類では遺体を配置してしまえば、単なる遺体を置く台となり、敷石としての特別な機能をその時点では重視することはできない。したがって、石棺に付属する施設、とくに灯明石は、出雲4期の時点で形骸化した施設になっていたと考えられる。

（3）中村1号墳A石棺の付属施設の特徴

中村1号墳A石棺の付属施設は、出雲で他に例がない2つの特徴を持っている。1つは石棺の仕障と敷石が一石で造られていることである。これは、王塚古墳の石棺底石と敷石が一石で造られている特徴に近い。ただし、A石棺の敷石と石棺仕障は、右側の灯明石と側石の隙間に挟みこむ構造で石棺底石とは別造りと考えられ、王塚古墳とは異なる。2つ目は上下2段の障石の存在である。左右の構造が若干異なるが、基本的には上段の障石は側石と灯明石をほど接ぎ加工で繋いだもので、側石と灯明石にそれぞれほど穴が穿たれている。そして、下段の障石で上段の障石を支える構造である。このように丁寧に加工されたものは他にない。これによく似た構造が、先にあげた御崎山古墳大石棺の左側の障石である。この障石は、厚さの異なる直方体の石が2段に重ねてあるようで、上段のものには、ほど接ぎ加工はない。この下段の障石がA石棺の下段の障石に変容したと考えたい。また、A石棺の下段障石は、厚さが薄く板状のもので、敷石II類の箱形を意識したものに近いとも考えられる。

したがって、中村1号墳A石棺の付属施設は、御崎山古墳大石棺や宮内II区1号横穴墓棺に近い特徴をもつことから、出雲東部からの影響を受けて造られたことがわかる。

第2表 出雲における組合せ式家形石棺の付属施設の特徴1

番号	遺跡名	型式	灯明石		障石	位置 ＊2	石棺の仕障	敷石	備考	土器編年	
			横断面 ＊1	窪み						出雲	畿内
祖形	福岡県王塚古墳	I a	イ	有	有	α	石屋形底石と 敷石が一石	有			TK10
1	御崎山古墳大石棺	I a	イ	無	有	α	単体	不明	2段の障石 右側の灯明石・敷石・ 障石を取り除く	出雲3期	TK43
2	宮内II区1号横穴墓棺	I a	口	有	有	α	単体	有		出雲3期	
③	中村1号墳A石棺	I a	口	有	有	β	敷石と一石	有	2段の障石	出雲4期	
4	白石クリS-2号横穴墓棺	I a	口	無	有	β	無	有		出雲4期	
5	高広IV区1号横穴墓棺	I b			有		単体	有		出雲4期	
6	白石クリF-2号横穴墓棺	I b			有		単体	有		出雲4期	
7	渋山池5号横穴墓棺	I b			有		無	有		出雲4期	
8	白石クリF-1号横穴墓棺	I c					単体	有		出雲4期	
9	白石クリS-3号横穴墓1号棺	I c					無	有		出雲4期	
10	白石クリS-3号横穴墓2号棺	I c					無	有		出雲4期	
11	古城山3号横穴墓棺	I c					単体	有		出雲4期	
12	矢田II群2号横穴墓棺	I c					無	有		出雲4期	
13	渋山池2号横穴墓棺	II d	口	無	有	β	単体	有	石床から人骨出土	出雲4期	
14	穴神1号墳横穴墓棺	I c					無	有		出雲5~6期	
15	島田池1号横穴墓棺	II d	口	有	有	β	単体	有		出雲5~6期	
16	島田1号横穴墓棺	II e					単体	有		出雲5~6期	
⑯	神門10支群H-1号横穴墓棺	II e					石床と一体	有		出雲5~6期	
⑰	上塩治32支群6号横穴墓棺	II e					石床と一体	有		出雲5~6期	

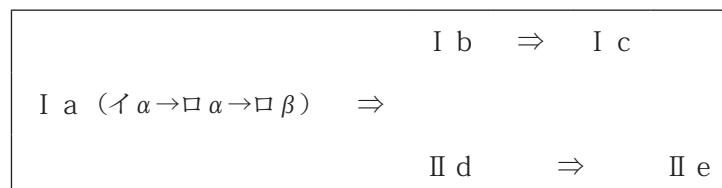
③・⑯・⑰は出雲西部、それ以外は出雲東部

*1灯明石の横断面形状 イ:長方形 口:円形状

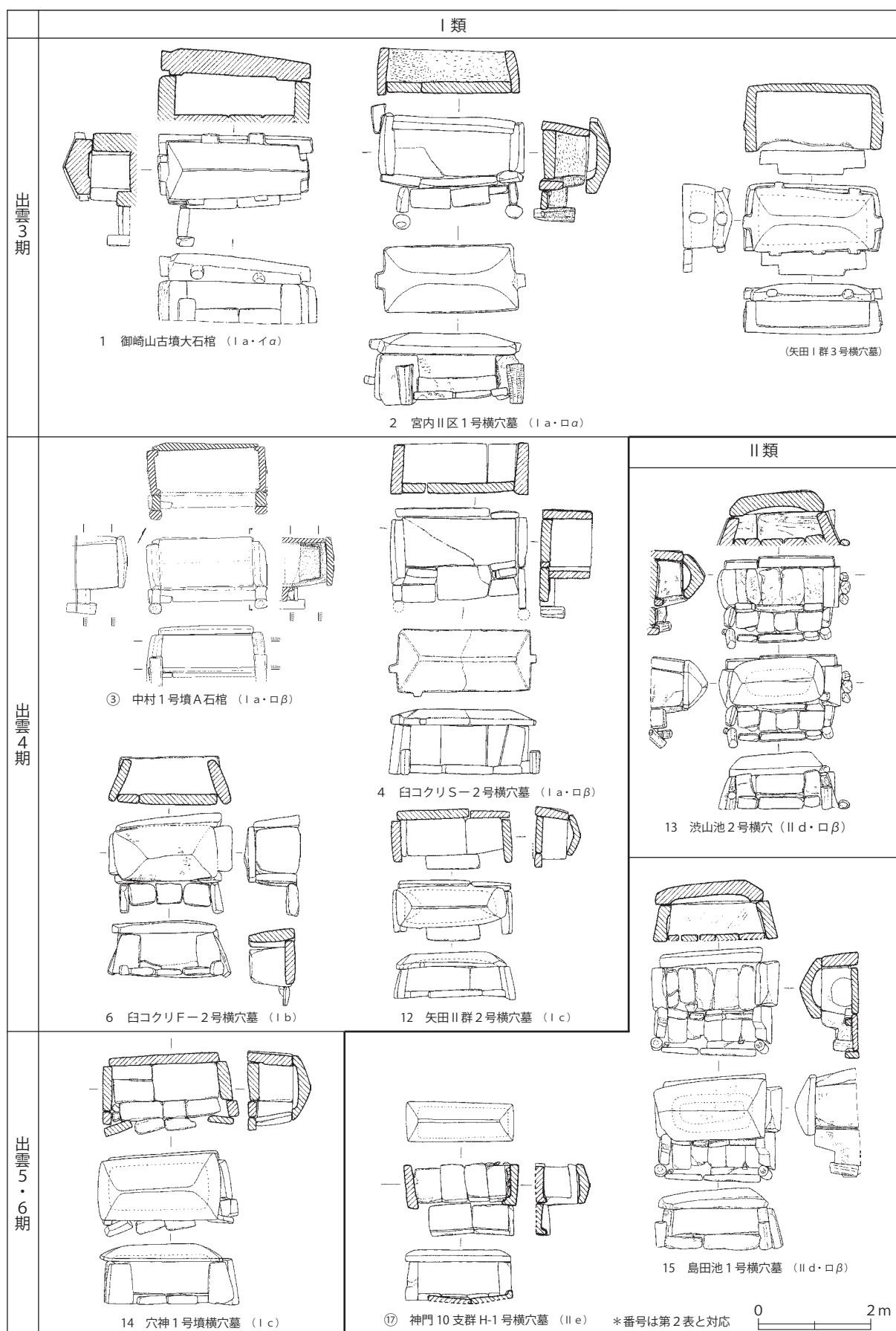
*2側石・障石・灯明石中心の位置 α:中心がそろわない β:中心がそろう

第3表 出雲における組合せ式家形石棺の付属施設の特徴2

時期	I a			I b	I c	II d	II e	畿内
	イα	口α	口β			口β		
出雲2期	○ (王塚)							TK10
出雲3期	○	○						TK43
出雲4期			○	○	○	○		TK43未~209
出雲5~6期					○	○	○	飛鳥1~2



第7図 出雲における組合せ式家形石棺付属施設の型式組列



第8図 組合せ式家形石棺に伴う付属施設の変遷（1:100）

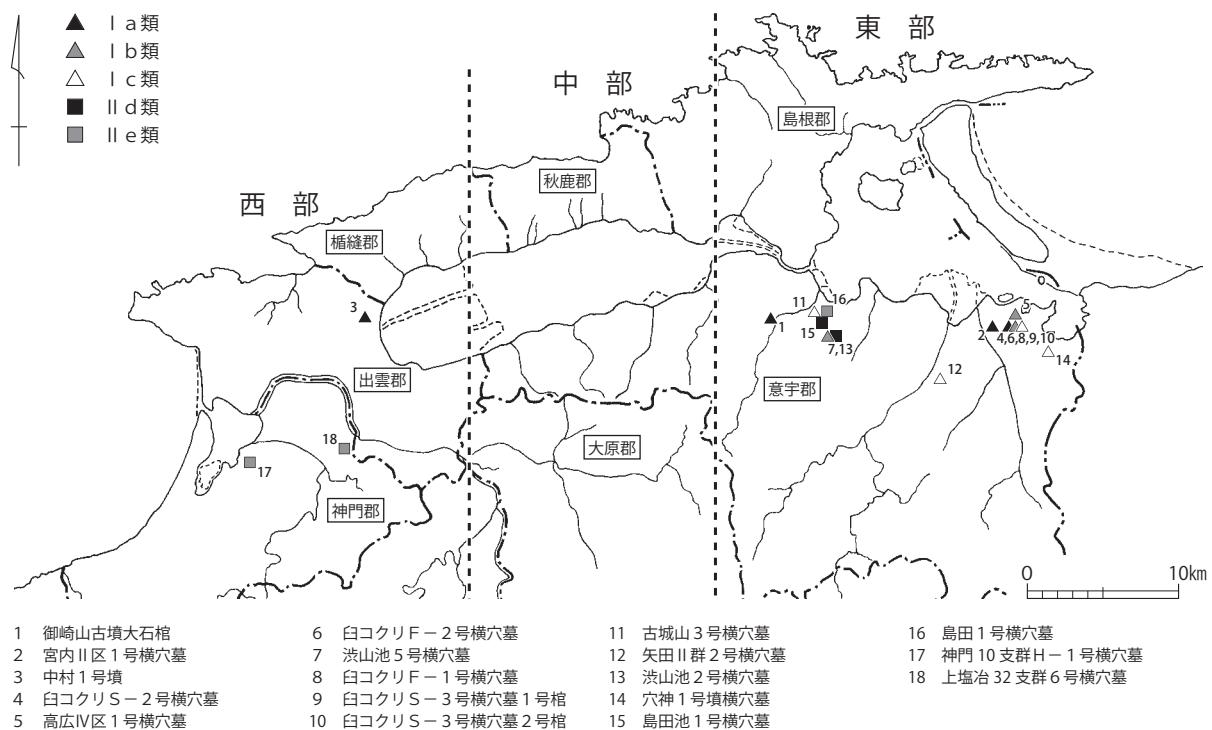
以上、灯明石の導入と展開についてまとめた。灯明石の導入期頃は内田律雄が指摘するように灯明石と敷石がセットで機能したものと考えた。しかし、出雲4期頃からは灯明石を省略するものがあると考えられる。灯明石は中村1号墳A石棺のように基本的に掘形によって自立させている。取り除かれても臼コクリS-2号横穴墓棺のように掘形があるはずである。掘形の痕跡がないものは、当初から灯明石がなかったと考えるのが妥当であろう。

灯明石が付属する棺は、横口がある開かれた棺で、閉ざされた棺には伴わないようである。本稿では、灯明石の機能について明らかにすることはできなかった。今後は、出雲の灯明石の祖形と考えた王塚古墳などの開かれた棺が採用される地域で、灯明石の類例と機能の検討が必要であろう。

(4) 組合せ式家形石棺に伴う付属施設の分布からみた出雲

ここでは組合せ式家形石棺に伴う付属施設の分布状況を示し(第9図)、先に示した出雲3地域区分の中でそれぞれの地域関係についてまとめてみたい。付属施設を伴う家形石棺は、出雲東部に16基、出雲西部に3基あり、中部にはないことから、基本的な分布の中心が出雲東部にあることは明らかである。それでは、時期と型式ごとに詳細してみたい。

出雲3期におけるIa類の出現は出雲東部の御崎山古墳棺などと考えられる。その後の出雲4期に出雲西部の中村1号墳A石棺が造られたと考えられる。これは、Ia類を細分した特徴の新古や、他の副葬品の新古関係からも明らかである。その他のIb・Ic類も出雲東部で出雲5~6期頃まで展開する。出雲4期にはIId類の渋山池2号横穴墓棺が出雲東部で出現し、その後、出雲5~6期にも継続し、また、新たにIIe類の島田1号横穴墓棺が出現する。同じころ出雲西部にIIe類の神門10支群H-1号横穴墓棺と上塩治32支群6号横穴墓棺がある。IIe類は出雲東部に1基、出雲西部に2基あるが、出雲西部の2基は、それまでの型式展開を考えると出雲東部の影響を受けて造られたと



第9図 組合せ式家形石棺に伴う付属施設の分布 (1 : 500,000)

考えられる。

以上のことまとめると、組合せ式家形石棺に伴う付属施設は出雲東部に分布の中心がある。出雲3期に出雲東部に出現し、出雲4期になって、出雲中部を飛び越えて出雲西部の中村1号墳A石棺に分布が広がる。出雲5～6期にかけても出雲東部から出雲西部への影響がみられる。したがって、出雲西部の組合せ式家形石棺に伴う付属施設は、常に出雲東部から情報を得て造られていることが明らかになった。これは、東西出雲の勢力関係を表しているのではなく、大きな出雲というまとまり、つまり同じ横口の開いた家形石棺を造りだす地域の中で、出雲東部からの影響を受けながら出雲西部地域が独自性を持って石棺を造っていたことを示している。また、東西出雲の中間の出雲中部は、石棺本体の形態も独特であり、それに加え石棺の付属施設を取り入れないことも合わせ、独自の石棺作りを行っていると考えられる。

6 まとめ

以上、出雲西部における組合せ式家形石棺の変遷と組合せ式家形石棺に伴う付属施設の変遷を示した。そして、中村1号墳のA・B石棺を組合せ式家形石棺2期に位置付けることができた。ただ、それぞれの前後関係を明確に導き出すことはできなかった。したがって、両石棺は同時期に設置されたか、あるいはごく短期間に追葬があり、その際にB石棺が設置されたものと考えられる。

A石棺には灯明石などの付属施設が伴う。これについては、出雲東部の影響を受けたものであることを型式組列から明らかにした。出雲東部から出雲西部への情報の伝播状況が明確に表れた事例である。また、B石棺は奥石がないという出雲西部の地域色が明確に表れていることを明らかにした。中村1号墳は、石室とB石棺が出雲西部、A石棺が出雲東部の特徴をもつ。このことから、中村1号墳の被葬者は出雲西部勢力でありながら、出雲東部勢力と交渉をしていた人物であったと考えられる。言い換えれば、A石棺の築造にあたっては、出雲東西勢力の厳しい規制があったのではなく、受容する側の意向でA石棺を採用したとも考えられる。

本稿を作成するにあたって角田徳幸、樋野真司、西尾克己に資料見学、資料収集でお世話になった。特に石棺図面については、大谷晃二にお世話になった。記して感謝する。

(坂本豊治)

註

- (1) 西尾がまとめた「発展することなく姿を消した」という評価は、かつて和田も同じような評価をしている（和田1983）。西尾らは剣抜式家形石棺の分布が限定的であることから、このような評価をしている。しかし、首長墓のみに採用される剣抜式家形石棺と、小規模な石室や横穴墓に採用される組合せ式家形石棺という違いは重要で、ここに明確な階層差が表れていると考えられる。また、剣抜式家形石棺で最も新しいと考えられる上塙治地蔵山古墳の時期も問題となる。西尾は出雲4期、筆者は出雲5期と考えている。したがって、「発展することなく姿を消した」という評価は妥当ではない。

- (2) 今市大念寺古墳前室棺は、上部が破壊されている。発見当時の絵図『今市大念寺洞中細見之絵圖』を見ると蓋石が家形であることがわかる。
- (3) 他に半分古墳の石棺があるが、詳細は不明である。半分古墳は開口後、埋め戻されていて、実測図が無く詳細は不明である。唯一の記録が、1897年のウィリアム・ガウランドの報告で、その報告について紹介したのが渡辺貞幸である。渡辺は石室と2基の家形石棺の寸法をメートル法で示した。そして、組合の石棺の蓋石の厚さが約18cmと薄いことから、土地所有者の談である家形石棺だけではなく、箱式石棺の可能性も想定している(渡辺1979)。中村1号墳A石棺の蓋石の厚さは約14cm(高さ約18cm)と薄い。蓋石が薄い家形石棺もある。
- (4) 『今市大念寺洞中細見之絵圖』の記載から判断した。
- (5) 神門10支群G-6号横穴墓棺は、横口がない石棺である。出雲西部のすべてが横口がある石棺に統一されたものではない。しかし、蓋石がないので、家形か箱形かは不明である。奥石の上面のレベルが均等でないため当初から蓋石が無かった可能性が高く、開かれた棺となる。
- (6) 灯明石の可能性がある石棺がもう1基ある。『八雲漫遊日誌』に記載がある安来市宮谷横穴墓群(№64)である。横口の組合せ式家形石棺で、「同質の石ヲ以テ造リタル丸形ノ門柱ヲ両側ニ立テタリ」という記事があり、灯明石と考えられるが、石棺自体の状況が不明である(大谷晃二1989)。
- (7) 出雲3期の剝抜式家形石棺の前の敷石について触れておく。今市大念寺古墳棺と妙蓮寺山古墳棺にも横口の前に敷石が置かれている。この二つの棺には、横口があるが閉塞石が伴うことが分かっている。剝抜式と閉ざされた棺という特徴から畿内系の棺と考えられ、九州系譜の灯明石と組み合う敷石とは、系譜が異なる敷石と考えている。また、出雲3期の安来市矢田I群3号横穴墓棺は横口のある剝抜式家形石棺である。敷石のみが残存していて、敷石の左右の前側には、長方形の割り込みがある。これらには初葬時に灯明石がはめ込まれていて、何らかの理由で灯明石と敷石側石が取り除かれた可能性があるが、障石の位置、灯明石掘り形の有無など不明な点があり、灯明石があったとは断定できない。

参考文献

- 石橋 宏 2004 「家形石棺の再検討」『古墳文化』創刊号 國學院大學古墳時代研究会 3~26頁
- 石橋 宏 2006 「山陰の家形石棺とその交流」『博望』第6号 東北アジア古文化研究所 45~78頁
- 出雲考古学研究会 1987 『石棺式石室の研究—出雲地方を中心とする切石造り横穴式石室の検討—』古代の出雲を考える6 出雲考古学研究会
- 内田律雄 2006 「黄泉の国の灯火」『季刊考古学 特集古墳時代の祭り』第96号 雄山閣 21~27頁
- 大谷晃二 1989 「『八雲漫遊日誌』に見る安来平野の横穴」『松江考古』第7号 松江考古学談話会 67~110頁
- 大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会 39~82頁
- 大谷晃二 1995 「出雲の古墳時代後期の切石石棺」『古墳時代後期の棺—家形石棺を中心に—』第23回山陰考古学研究集会
- 大谷晃二 1996 「総括」『御崎山古墳の研究』八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ 島根県教育委員会、島根県立八雲立つ風土記の丘 63~78頁
- 大谷晃二・松山智弘 1999 「横穴墓の形式とその評価」『田中義昭先生退官記念論文集 地域に根ざして』 田中

義昭先生退官記念事業会 95～122 頁

大谷晃二 2010 「山陰－出雲・因幡を中心にして」『日本考古学協会 2010 年度兵庫大会研究発表資料集』日本考古学協会 2010 年度兵庫大会実行委員会 453～457 頁

角田徳幸 1995 「出雲の後期古墳文化と九州」『風土記の考古学』3 出雲国風土記の卷 同成社 149～175 頁

角田徳幸 2004 「山陰地域の家形石棺」『大王のひつぎ海を渡る－宇土馬門石製家形石棺の謎－』第7回九州前方後円墳研究会・第1回石棺文化研究会資料集 第7回九州前方後円墳研究会・第1回石棺文化研究会大会事務局 33～44 頁

西尾克己 1999 「出雲西部における上塩冶築山古墳の石室と石棺の位置付け」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書4 島根県教育委員会 119～127 頁

山本 清 1971 「山陰の石棺について」『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会 81～174 頁

和田晴吾 1983 「出雲の家形石棺」『展望アジアの考古学－樋口隆康教授退官記念論集－』新潮社 433～451 頁

和田晴吾 2003 「棺と古墳祭祀（2）－『閉ざされた棺』と『開かれた棺』－」立命館大学考古学論集Ⅲ－2 713～725 頁

和田晴吾 2007 「東アジアの「開かれた棺」」『渡来遺物からみた古代日韓交流の考古学的研究』19～41 頁

和田晴吾 2010 「家形石棺」『日本考古学協会 2010 年度兵庫大会研究発表資料集』349～355 頁

渡辺貞幸 1974 「ガウランド氏と山陰の古墳（上）」『八雲立つ風土記の丘』No.37 2～6 頁

図版出典

本稿で使用した図面は、各報告書から転載したものである。石棺については、報告書を再トレースしたものがある。